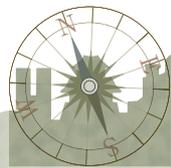


April  
号外  
2014

過去と現在を行き来しながら、  
未来を考える壁新聞

上町台地  
今昔タイムズ



上町台地 今昔フォーラム

UEMACHIDAICHI KONJAKU TIMES  
vol. 1 Document



企画・編集 U-CoRoプロジェクト・ワーキング / 発行 大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL)  
問合せ先 tel.06-6205-3518 (担当: CEL弘本) \*U-CoRo=ゆーころ (上町台地コミュニケーション・ルーム)  
ホームページ <http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/ucoro/index.html>

## 「上町台地 今昔タイムズ」とは

わたしたちが暮らす“上町台地”。古代から今日まで絶えることなく、人々の営みが刻まれています。天災や政変や戦災も、著しい都市化も経験しました。時をさかのぼってみると、まちと暮らしの骨格が浮かび上がってきます。自然の恵みとリスクのとらえ方、人とまちの交わり方、次世代への伝え方…。過去と現在を行き来しながら、未来を考えるきっかけに、U-CoRoプロジェクトStep 2\*では、壁新聞「上町台地 今昔タイムズ」を制作しています。

壁新聞「上町台地今昔タイムズ」  
第1号(第1面)



U-CoRo Step2 壁新聞プロジェクト関連イベント

# 第1回「上町台地 今昔フォーラム」を開催しました。

テーマは「都市の広がりの中に消えたもの・残されたものは？ 未来は？」



満開の梅の花に彩られた  
高津宮にて開催

## 上町台地 今昔フォーラム vol.1

■日時: 2014年3月16日(日)  
14:00～

■場所: 高津宮 参集殿

■主催: 大阪ガス エネルギー・  
文化研究所 (CEL)

企画: U-CoRoプロジェクト・  
ワーキング

### ■講演:

加藤政洋氏  
(立命館大学文学部 准教授)

### ■トーク・セッション:

吉田友彦氏  
(立命館大学政策科学部 教授)

酒井一光氏  
(大阪歴史博物館 学芸員)

加藤政洋氏  
弘本由香里  
(大阪ガス エネルギー・文化研究所)



U-CoRoプロジェクトStep 2\*では、壁新聞「上町台地 今昔タイムズ」を制作し、まちかどのコミュニケーションツールとして実験的な掲示を行っています。今回、その第1号と連動したフォーラムを3月16日に開催しました。

大阪のまちの近代、現代における変容をひも解いていく講演をいただいたのちにトーク・セッションを展開。会場の方々とともに、都市の広がりの中で失われていったもの、また残されているものを探りながら、未来への光に目を向ける機会となりました。

\*U-CoRoプロジェクトの詳細はホームページで。

上記アドレス、または「大阪ガス」×「U-CoRo」で検索してご覧いただけます。



今回会場の高津宮にて掲示されている  
壁新聞「上町台地 今昔タイムズ」

講演(ダイジェスト)

# 「20世紀大阪 都市化の空間文化誌」

加藤政洋氏(立命館大学文学部准教授)



かとう・まさひろ

専門は社会・歴史地理学。著書に『大阪のスラムと盛り場』、『花街 異空間の都市史』、『都市空間の地理学』(共著)など。

明治期以降一気に進んだ都市の拡大とはなんだったのでしよう。市街地の広がりの中には、その土地に宿る文脈がおのずと現われ、固有の風景を生み出しています。市街地化・都市化の最前線、昭和初期大阪の周縁部の変化に着目して、中心と周縁のダイナミズムについて考えます。



## 周縁からひも解く近代大阪

今日は、昭和初期大阪の都市の形成と拡大について、お話ししたいと思います。私は、大阪と縁の深い上田(長野県)ではないのですが(笑)、隣家は桑畑の向こうという信州出身です。学生時代、授業の一環で大阪へ来て最初の昼食が釜ヶ崎の食堂という強烈な出会いから、すぐにこのまちにはまりました(笑)。

大学院時代を大阪で過ごしなが、都市をその周縁から読み解く試みを『大阪のスラムと盛り場』という本にまとめました。例えば、電器屋街・日本橋の前身である長町は、都心から紀州街道沿いに南へ細長く伸びた市街地で、元々は旅籠街、明治期には貧しい人が暮らす、近世・近代大阪の周縁部の一つでした。その長町は釜ヶ崎の成立にも深く関わっていたため、そこから釜ヶ崎にも関心が向かいます。また、初めて見た、前夜の熱気が残る朝の景色が忘れがたい千日前も、のちに上町台地の南へ移る墓地でしたし、高津宮ゆかりの黒門市場も振り売り、立ち売りから20世紀初頭に店舗へと変容していく。そんな大阪の周縁部から、都市の近代をひも解きはじめてののです。

その後、関心は花街にも広がりますが、その多くは明治期以降に登場し、昭和初期にかけての都市の拡大過程で、随所に生み出されてきたものです。

こうした都市の拡大とは、一体何だったのでしょうか。『上町台地・今昔タイムズ』1号にある明治期の地図が、江戸期の都市化の到達点で、大阪という都市の原風景です。そして、明治期以降の大阪のあり方というのは、この都市の原初的な空間を核に、周辺へと広がる過程であったと理解することができます。

## 近代の都市拡大のモデル化

都市化とは、市街地がただそのまま郊外へ広がることなのでしょうか。市街地が広がる際には、地理的・歴史的な文脈や、そのまち独自の土地利用や住まわれ方に従うなど、都市固有の風景が登場してくるのではと考えられます。

そのモデル化を、自動車産業が勃興してくる1920年代のシカゴ(米国)のまちで、シカゴ学派と呼ばれる人たちが試みました(P.3下図左参照)。都心から郊外への都市的な土地利用の広がりには、独特の秩序があるのだと。例えば、

都心の周辺に工場が立地し、そこに労働者のまちができる。その外側には、鉄道網の発達も影響しつつ、住宅に特化した地帯ができる。さらに外側に、少し質の高い住環境地帯ができるというものです。

私たちもそのモデルをもとに、近代日本における城下町都市の拡大のモデル化を試みました(P.3下図右参照)。旧城下町の周辺では、昭和10年代(1930年代後半)に無秩序な市街地拡大もあった一方、耕地整理事業や区画整理事業が施行されたりもしました。その外側では、電鉄会社による比較的良質な住環境整備も進むなど、城下町部分を核として、ある程度、秩序ある形で、都市は広がっていったと言えるでしょう。

また、昭和8(1933)年にはすでに、歌舞伎町(東京都新宿区)の生みの親でもある石川榮耀が、シカゴ学派のように近代都市のあり方を、名古屋市を舞台に簡単なスケッチでモデル化していました(P.3上図参照)。お城と城下町の旧市街地が中心で、周辺に労働者の住宅や工場、さらには商業地や盛り場などが混在する「場末帯」というものが存在する。それらの外には郊外住宅も

できてくるというものです。都市に集まる人口が、都市の外へと拡散しながら、それぞれの住み家を見つけていく。都市空間の広がり方を、石川はシンプルな構図で表したのです。

### 中心性も帯びる都市の周縁

ここ上町台地の坂は、市街地の広がりや世俗の縁が切れるところでもあります。近松門左衛門の『曾根崎心中』の冒頭で、この境界は心中という悲劇へ向かう主人公たちの物語を導くため、世俗との縁が切れつつも、そこに縁を掛けていくという、象徴的な舞台として描かれています。そして、坂は人が集まる名所となり、周縁でありながらも中心的な性格を持ってきたのです。

実は、ここ高津宮と生玉さんの間にも以前は花街があり、明治13(1880)年の大阪朝日新聞には、地域振興のために復活を請願した記事があります。花街はその営業が野放図になると取り締まりの対象となり、明治維新以降、大阪に散在していた花街的な空間の多く

が取り潰されます。いかがわしいと排除された周縁的なものが、一方で中心性を帯びてもいたのです。

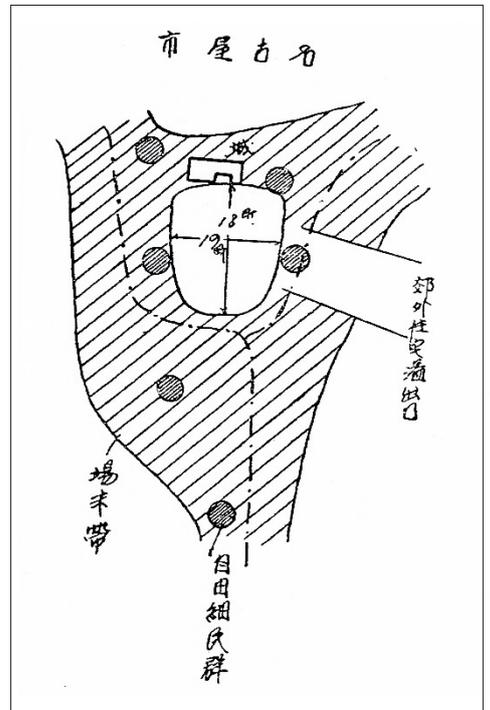
### 「大大阪新開地風景」に見る新開地の空間文化誌

戦前の雑誌『大大阪』に、当時の場末帯を探訪した『大大阪新開地風景』という興味深い連載があります。その巻頭言(P4図参照)にもある「新開地」とは、都市化の過程で開発されたり、自然発生した市街地など、新しく開かれた土地を指す言葉です。その連載内容を4つに分類して、捉え直してみました。

#### [1.都市化のフロンティア]

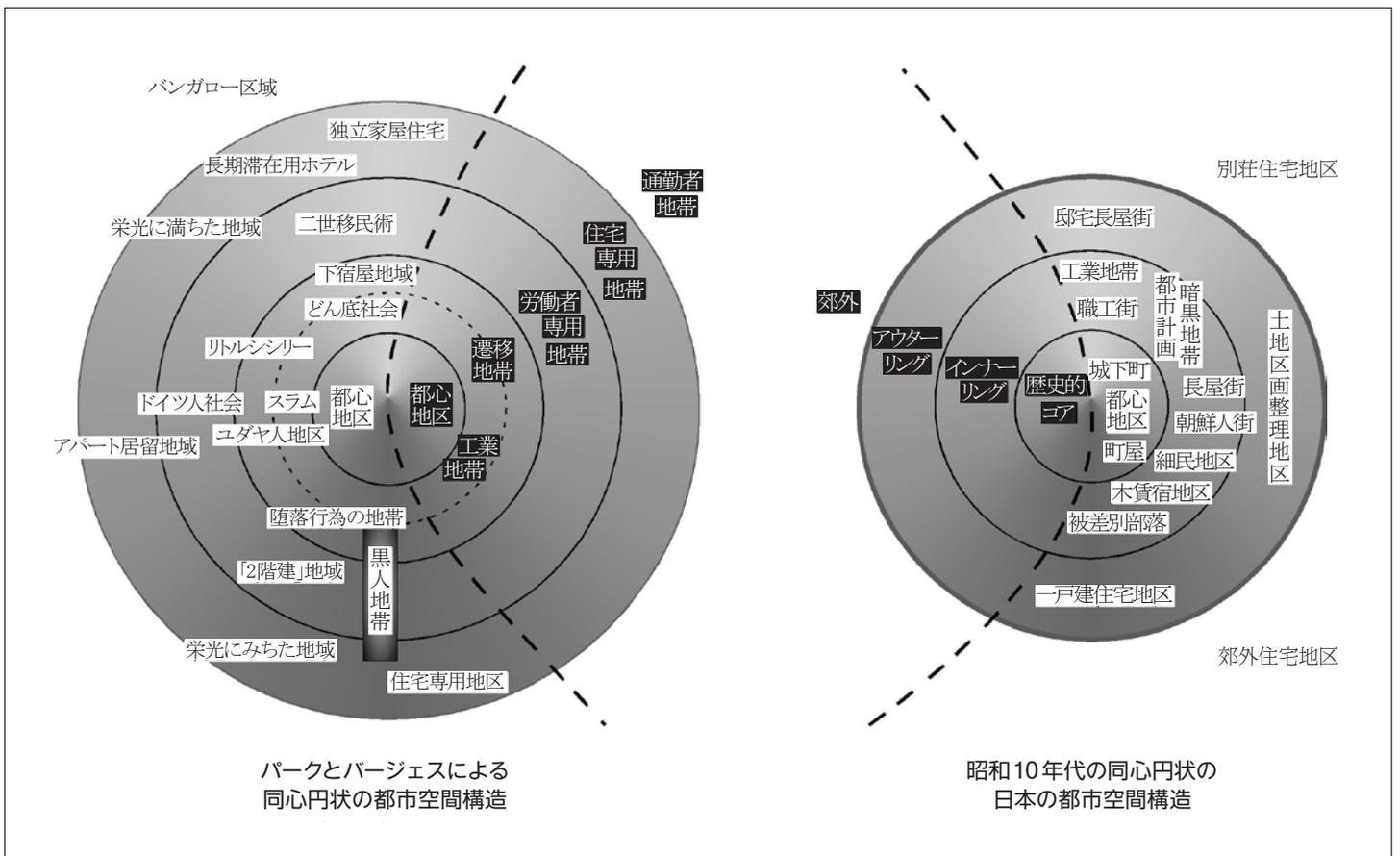
都市の周辺では農村的な風景とのせめぎ合いが生じます。大阪市東部の今福(城東区)では「大大阪の大きさを見るには、今福方面に来てみるといゝ(以下の引用も原文まま)」とあり、「都市化のフロンティア」では市街地の切れ目が見えていたようです。

また「動く大阪。堂々たる生産面に立つて、大阪は四方八方に手を振り、足を



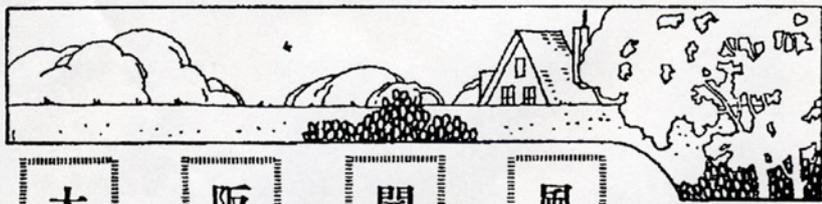
石川榮耀による近代都市のモデル

延ばして動いてみるのだ」と、四方に延びる鉄道や道路に沿い、市街地が拡大する。大阪から南へ向かう阪堺国道では「この新道路は、その左右に逃避した市民の適応した住宅地を繁殖した」と、開通した道路沿いに住宅地ができて、



シカゴ学派が提唱した都市モデル(左)と加藤氏らによる城下町都市の拡大モデル(水内俊雄・加藤政洋・大城直樹著『モダン都市の系譜』)

—(試一十第卷八第版大大)—



大 阪 開 風 景  
大 新 地 景

新 道 沿 線 街 園  
— 九 月 號

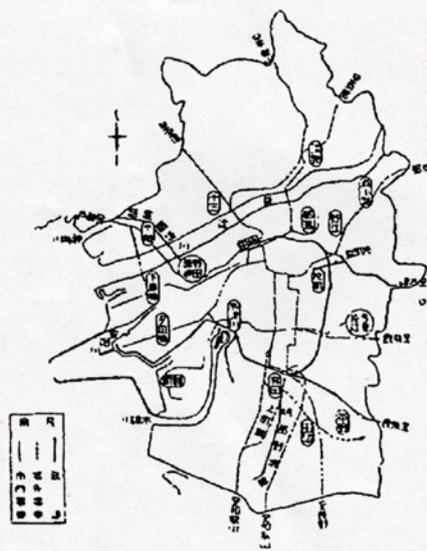
今 里 新 地  
— 八 月 號

千 舟  
— 七 月 號

森 小 路  
— 七 月 號

紹 介 清 みの 箇 所

— D —



都市の高度の發展は、都市の顔を複雑に變へてゆく。いままでの古い現象がとり壊されて、新しい現象が發達し、そこに新開地が展開されて来る。

この新開地には新しい人情と、美と麗と、未生長の若々しい感觸がある。われわれは日々、の業務に追はれて、これ等の新開地に接する餘暇を持たない。

そこで大大阪に於ける新開地を、次ぎ／＼と取り擧げ、これに精査と分析とを與へ、單なる机上の統計でなく、足が書いた具體的な、しかも一編の風景畫として紹介したい。(左圖は紹介の新開地)

— ( 90 ) —

「大大阪新開地風景」の連載記事の扉(「大大阪」第8卷第11号1932年10月)

都心から住民が移り住む様子が書かれています。

## [2. 居住分化、階級／民族の景観]

市街地の拡大では“住み分け”のような面も見られます。先ほどの今福付近では「労働者街であるだけに、不景気は深刻にこたへる」とありますし、大阪市北西部の佃(西淀川区)も「工場地帯だ。労働者の町だ。」と書かれています。また、阪界国道沿いでは「且てのブルジョア階級街を、適當の街へ変へ、ブルジョワ階級を、遙南海の海岸線及阪神沿線に追ひやつた。」と、郊外住宅地の一層の遠隔化が示されています。

「逃避市民の集団……大大阪の地図

の最境界線に近き新興街のスナツプ……労働者街。遊玄人街。役人街。商人街。大工、手伝、左官の如き職人街。手工業者街。サラリーマン街。」と、増えた人口は自分の職業などに見合う土地を選んで住み、それによって各地区の特色が鮮明化していきました。

## [3. 消費の景観]

場末帯のもう一つの大きな特徴は“消費の景観”です。住み、働くだけでは生活は成り立ちません。娯樂が必ずといって良いほどセットになっていた地元密着型の商店街。「心(心齋橋)ブラ」「千(千日前)ブラ」などの当時の言葉のように、商店街をただブラブラと歩くこ

と、そして多くの商店街にあった映画館や劇場が娯樂の中心でした。

京橋付近の東野田では「第二の玉造——街は、どうしても劇場や市場の付近がその土地での大通りになるらしい。」と、カフェや食堂、雑貨屋などが建ち並ぶ、消費に関連する風景が随所に現われてきます。

## [4. 新地の景観]

そして、わたしが一番関心を持つ“新地の景観”です。大阪市東部の今里新地、港区の港新地、南部の飛田や住吉新地、新世界の南陽新地、他にも非公認なものも含めて、「新地」と称される新たな花街が場末帯に登場してきます。それら都市周縁の花街の多くは、住宅と同様、郊外化していくのでした。

## 中心のかつ周縁的な空間性のダイナミズム

都市には開発理念や計画がある一方、半ば無秩序な、モザイク的な広がりも生じ、“住み分け”なども起こります。また、都市は住む場だけでも成り立たず、さまざまな形態の娯樂が集積し、商店街などが出現する。さらには周縁に小さな中心性も生まれてきます。

賑わいが生み出される場所は、ときに周縁的な部分に呑み込まれ、ポテンシャルが落ちることもあります。しかし、また何らかの可能性をつかみ、新しい中心性を獲得することで、再び賑わいが生まれ得るのです。

都市をその中心と周縁という関係性で大きく捉えることはできるとしても、少なくとも20世紀前半の都市は、非常にダイナミックに動いていく存在でもあったと言えるでしょう。



トーク・セッション(ダイジェスト)

# 「100年余にわたる都市の広がりとその先は？ 消えたもの・残されたものから…」

地理学に加藤政洋氏の講演に引き続き、大阪歴史博物館の酒井一光氏と立命館大学の吉田友彦氏より、都市の変容について、建築・都市計画の視点からお話をいただきました。それを受けたかたちで、改めて加藤氏にも加わっていただき、会場の声も交えながら活発なトーク・セッションを展開しました。



## 都市化の進展のなか、今も失われつつある貴重な建物

酒井一光氏(大阪歴史博物館学芸員)



大阪府域が一気に拡張し「大大阪」と呼ばれた時代、都市と農村がせめぎ合うなかで、どのような建物がつくられ、また失われていったのか。残された建物から大阪の文化を見つめます。

さかい・かずみつ  
専門は建築史。著書に『近代大阪と都市文化』(共著)、  
『窓から読みとく近代建築』(共著)など。



古舟板が使われている吹田の住宅



野田の住宅 塀の奥の主屋で古舟板を使用



和洋折衷型の住吉区の住宅

私からは、「大大阪」と呼ばれた時代、都市化が進むなかでどんな建物がつくられ、今残っているのか。また失われつつあるのか、お話しさせていただきます。『建築と社会』という建築の専門雑誌で、昭和4(1929)年頃から「郷土建築」

特集が組まれはじめました。「郷土建築」という言葉で表される建物は、その当時はまだ文化財になっていない、江戸期築の商家や農家、あるいは明治初期の洋風建築などです。その頃、明治初年から60～70年が過ぎ、古い建物が次々と取り壊されていました。せめてそれらを写真や記録などの形で残そうと特集が組まれたのですが、現在もある歴史的な建物を慈しみ、大切にしようとする考え方は、昭和初期にもあったのです。

大阪歴史博物館の開館(平成13<2001>年)前に、江戸期後半の町並み模型の制作や近代の街角の再現のため、私も資料を求めて大阪中を歩き回りました。その際、参考にした本の一つが『近世風俗誌 守貞謾稿』で、同書の大阪・京と江戸の町家の対比のなかで、大

坂・京の大きな商家での、古い舟板の建物外壁への再利用が紹介されています。古舟板の実物を探し回り、吹田や豊中、八尾などで見つけ、3、4年前には野田(福島区)で、解体直前の明治時代後半の住宅の玄関脇にも、古舟板が製材されて使われているのも見つけました。都市周辺部の地主さんの家で、古舟板の活用例がまだ残っていたのです。住吉区にもおもしろい住宅があります。



『建築と社会』第15輯第8号  
(日本建築協会 1932年)

正面右に三角屋根の洋室、真ん中は和風、左手は町家風の低い建築という和洋折衷型ですが、一見すると増築を重ねてこのような形になったようにみえますが、実際は昭和初期にこの形で一斉に完成したものです。玄関は昔の武家屋敷の式台玄関のようですが、洋室はスクラッチタイル張りでステインドグラスがあるなど、当時の流行をいくつも取り入れています。周辺は郊外住宅地として開発されていった場所でした。

戦後すぐのアパート建築では、上町台地の斜面、阿倍野区と西成区の境に建つ「新・福寿荘」という現代アートの拠点があります。崖下からだと3階建ての要塞のようにも見えるもので、平地のイメージが強い大阪で、上町台地周辺には高低差を活かした創意に富んだ建物も多いのです。

最近では銭湯も、失われつつあるもの

として注目されています。生野区の「源ヶ橋温泉」は、戦前のお阪のモダンな銭湯建築を代表するひとつ。正面に飾られた自由の女神像は“ニューヨーク”と“入浴”の洒落で、シャチホコのようなものも屋根に載っています(笑)。円窓などの昭和10年代(1930年代後半)に流行ったデザインも見られます。

最後は、昭和14、15(1939、40)年頃の一風変わった住宅です。関東大震災後の復興建築でもある同潤会アパートと同じようなモダンな住宅が、大阪市南西部の西成区津守に残っています。今は無人ですが、両側に住戸がある路地や廊下が建物内に張り巡らされ、住宅街がビルドインされている感じです。実はこれ、下水処理場内のポンプ場の上にあるのですが、当時の長屋よりも先進的な住まいの形が実現しています。

大阪の周辺には、都市周辺部ならではの



西成区山王の木造アパート「新・福寿荘」



生野区にある「源ヶ橋温泉」のモダンな外観

の建築様式が、まだまだ残っている可能性があります。ご紹介してきたような、まさに普通にあって見過ごされている建物が、身近で見つかるかもしれません。

## 大阪東成・生野の100年～御幸通商店街の変化を中心として

吉田友彦氏(立命館大学政策科学部教授)



よしだ・ともひこ

専門は都市計画・まちづくり論。著書に『躍動するコミュニティ・マイノリティの可能性を探る』(共著)など。

大正時代に始まる生野・東成両区の  
耕地整理と長屋住宅地・商店街の誕生。  
時を経てコリアンの集住と商いの  
展開へ、都市の縁辺部に宿る可能性  
とまちを更新する力について考  
えます。



生野区と東成区の地形図(1929—31年)

私からは、商店街の方々のお世話になりながら重ねてきた調査から、少々ご無沙汰しておりますが、生野・東成両区での在日コリアンの集住の成立経緯も踏まえ、都市の周縁がどう形成され、どうなってきたか、お話ししたいと思います。

両区一帯では「鶴橋耕地整理事業」が大正8(1919)年に認可され、旧集落の地主たちが、田畑を耕地整理してニュータウンをつくりました(上図参照)。当時の周縁の形成のされ方の一例です。大阪電気軌道(現・近鉄)と城東

線(現・JR大阪環状線)の交点があるのが後の鶴橋駅ですが、玉置豊次郎氏は『大阪建設史夜話』のなかで、一気にまちができたと書いています。東西の画地に下水道などの基盤整備が進み、田畑が長屋を中心とした住宅地と化しました。

加藤さんが紹介された『大大阪』にも「玉造心齋橋筋を南へ鶴橋駅まで行く」と朝鮮町がある(原文まま)とあります。当時は鶴橋駅の北東にあったコリアンの集住地が、次第に、現在コリアタウンとして知られる御幸通の方へ移っていきました。

聞き取り調査では、大正15(1926)年には御幸通に公設市場があり、そこを中心に西の商店街がまずできたそうです。また、御幸通の一本南側にはいわゆる朝鮮市場があったそうで、戦時中に日本人商店主の疎開で空き家が増えていくなか、表に移ってきたという証言もありました。(右図参照)

昭和20(1945)年6月15日の空襲で、御幸通の中央から東部が焼失します。戦後、その東部に千代市場ができて、商店街のポテンシャルが高まり、東西に並ぶ3つの商店街が形成され、現在に至ります。

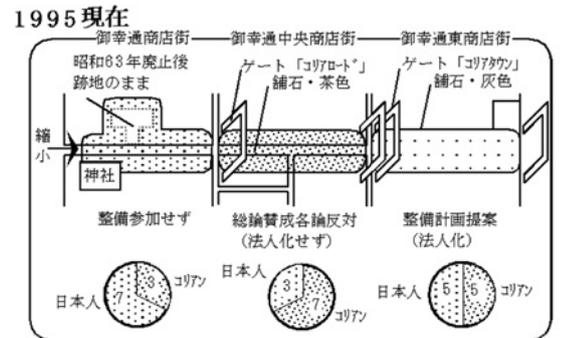
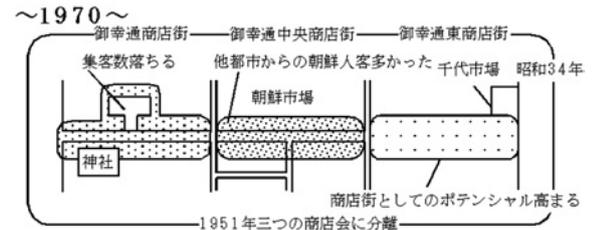
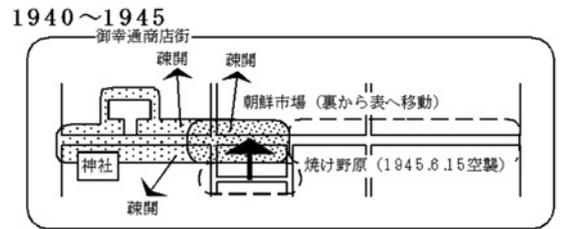
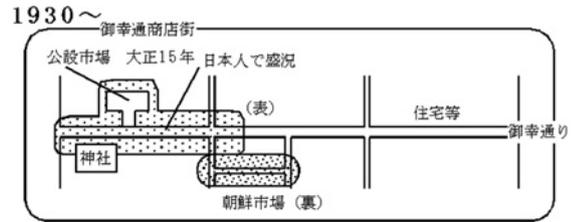
平成7(1995)年に行なった調査では、商店主の割合が西の商店街では日本人7:コリアン3、中央では逆の3:7、新しい東側では半々という状況でした。商店街に郷土色豊かな門を建てるなど、コリアタウンとしての様相を強めはじめたのもその頃です。

商店主は、日本人は2代目以降で高齢の方が多く、建物は古い木造の住宅

で50平米以上が主でした。コリアンでは女性の商店主で初代が多く、自宅は生野区内。店は小さな敷地のなか、鉄筋コンクリート・鉄骨造で3階建て以上が多かったです。

平成18(2006)年には業態の変化などを調査しました。それまでの10年間で、商店街では日本人商店主の廃業、コリアン商店主の転業が進み、変化のない商店がともに半々という結果でした。中央と東の商店街では店も経営者も次々入れ替わって活性化が進む一方、西では入れ替わりなく、廃業が進んでいました。

以上のことをまとめてみますと、まず、生野・東成両区では耕地整理と長屋地区という背景のもと、まちが形成されていきました。戦前のコリアンの集住は、旧集落を内包しつつ戦前から都市化された鶴橋駅北東部で顕著でしたが、戦後は現在のコリアタウン境界のほうに移ります。御幸通の3つの商店街には、それぞれ特徴がありました。なかでも、日本人商店主は比較的高齢だったこと



御幸通商店街の形成過程

もあり、廃業して店も更新されないまま。一方、コリアンの商店主は比較的元気で、建物の建て替えも進み、まちが更新されてきているという状況です。

## 失われたもの、残されているものから、未来への光を考える

語り手=加藤政洋氏、吉田友彦氏、酒井一光氏 聞き手=弘本由香里

### まちの全体像を体感することの意味

**弘本** 住民がまちの全体像を体感することは大事だと、加藤さんから以前うかがいました。近世の大坂の人々は、まちの周辺を歩く三十三観音巡りや七墓巡りなどを楽しみながら、まちの広がりも体感していたようですね。ダイナミックに変化するまちにも、何らかの統合

感は必要かと思いますが。

**加藤** 観音や墓地を巡る習俗の多くは、コンパクトだった近世の大坂の縁(ふち)、エッジの部分歩くことにほかなりません。そうすることで、当時の人々は都市の広がり認識していたのでしょう。

では、現在はどうでしょうか。ある駅から駅へ地下鉄で移動する。その間の地上がどのような風景なのかはわからない

という、まちとの関係性。現代の大都市では、まちの大きさに私たちの経験が圧倒されています。

このような現代都市では、さまざまな土地やその歴史などを結び合わず、より開かれた関係が必要だと思います。一步外側とつながる、まち歩きやまちづくりのネットワークなど、多様な取り組みや試みが起こりつつあると思います。



## 都市周縁でのモダン建築とその源泉

**加藤** 酒井さんが紹介された津守（西成区）の建物は、どのような計画のもと、誰に提供されていたのでしょうか。『大分新開地風景』でも地名を冠したアパートが、モダンな建築で目を引いていると書かれています。こうしたアパート建築のユニークさや立地、また銭湯のモダンさの由来に関してもうかがいたいのですが。

**酒井** むずかしい質問ですね（笑）。津守ではどんな人たちが住んでいたか、実はよく分かっていません。おそらく職員であったのでしょう。昭和40年代（1970年代前半）頃までは家族世帯が住んでいたようです。戦争も近づく昭和初期に、鉄筋コンクリート造の耐火建築に住むことも、何か特別な意味があったのかもしれません。

東京の同潤会アパートも、青山や代官山など戦前は郊外だった地域にありました。大阪でも、都島区内に同潤会風のアパート（トヨクニハウス）があるように、その多くは都市が拡張していった地域に建ちました。建築様式はモダニズムの建築家たちが先導したような、衛生的で災害にも強い住宅を広めようという考え方や流れが、都市周辺部でも起きていたのかと思います。

都心や郊外の木造密集地帯へ建った銭湯も、東京では大屋根の寺院風の外観が多く、京都は町家風、大阪ではモダンなデザインの銭湯が見られました。解体された美草園温泉や三国の双葉温泉も鉄筋コンクリート造で、内装も非常にモダンなうえに、装飾的な要素も兼ねつつ衛生思想なども反映し、浴室は総タイル張りでした。

**会場** 大阪が日本一の人口だった頃、今、思う以上に活気があったのではないのでしょうか。住宅の取り組みも先進的、

意欲的で、そのなかで銭湯もモダンになったのかもしれませんが。津守の建物は職員寮、あるいは下水処理場建設前に、そこに住んでいた人たち向けではとも思われます。

**加藤** 御幸通商店街の娯楽機能はどうだったのか、吉田さんにかがいたいのですが。また、コリアタウン的なカラーが高まること、それが一つの文化戦略となることで、周縁にありながら中心性が一層高まりつつあるとも言えるのでしょうか。

**吉田** 歓楽街的なものは、東の今里新地へ吸収されていったのかもしれませんが。また、中心性ではないのかという点ですが、コリアタウンは発信力も高く、確かに今は中心になりつつあると言えます。

**会場** 私が住む生野区は、銭湯や喫茶店が日本一多いと言われていました。ものづくりのまちが家内工業、零細工場が主で、仕事場を広くとるため風呂は銭湯。打ち合わせ場所もないので、一日に5回ほど喫茶店へ行きました（笑）。人口密度もすぐく、今は3人暮らしの私の家に、住み込みの職人さんなど30人が暮らし、斜め向かいには50人！（笑）。それと、寒いときも水を使う銭湯の仕事には、北陸出身者が多く携わり、蓄えてから郷里の人を呼び寄せ、独立もさせていたようです。在日コリアン自身のための商店街だったコリアタウンも、日本人が焼き肉やキムチを好きになりだし、交流も深まり、観光地化しはじめたように思います。

## “縮小の時代”への岐路から未来へ

**弘本** 過去百年で増えた人口が今後百年で減少していくなか、将来像は見えてきません。人口増の時代を振り返ることで、人口減の未来への示唆が何か見つかるのでは。そんな意図もこのフォーラムにありました。まちの活力や健全性を維

持していけるのか。歴史の連続性を常に意識しながら、将来を構想することが必要かと思いますが、それも念頭に、最後に一言ずつお願いします。

**吉田** 縮小都市は今考えているテーマの一つです。愛知県でも密集地を調べたのですが、大阪や京都とは驚くほど違う低密度でした。密集地の問題と縮小都市のことは、一つの根っこのものでしょうか。都市の拡大や縮小はダイナミズムのなかで考えるものですが、そこにはオールマイティな答えはない。これからも追いつきたいです。

**酒井** 大阪などの都市は流入者も流出者も多い。そういう人たちが地域の歴史を知るためにも、今も残る昔の建物は大切です。銭湯を残すためにカフェなど別の要素を付加するのも有効ですが、一番大事なのは、昔のままの用途で使われ続けていくことです。何とかその歴史が伝わる残し方を考えていきたいですね。

**加藤** 「今ここ」という意味の“nowhere”のハイフオンをずらすと、“no-where”「どこにもない」。「今ここ」は「どこにもない」ことのように、誰もが常に歴史のターニングポイントに立っています。私たちが受け取った文化的遺産は、ただ残すだけではなく、未来へ投げ返していく。その責務も負っているように思います。また、これまで広げてきたものをどう畳むか、考える時期にも直面しています。

まちづくりでは、やはり開いていくことが大切です。インフラの有無などに関わらず、人が集まる場所こそが都市的なところ。そこで交流や交歓などがあり、イノベーションが起き、新しい経済が生まれる。「共存」というより、節度ある寛容性を持って「共在」する。そうした場がこちらこちらにできていくことにこそ、可能性があると思います。